

◎ ロッキード事件とインテリジェンス

ロッキード事件年表

- 1972・7・7 田中角栄内閣発足
- 8・20 コーチャン来日、対日売り込みが本格化
 - 23 丸紅の檜山社長、田中に5億円約束
 - 31 ハワイで田中・ニクソン日米首脳会談
 - 9・1 日米首脳会談、旅客機緊急輸入で合意
 - 10・5 ロッキード受注失敗との情報
コーチャンが児玉に依頼、中曽根康弘通産相が協力
 - 6 福田太郎「中曽根が転覆に成功」と連絡
 - 9 国防会議がPXLの国産化白紙撤回
 - 30 全日空がトライスター機を正式発注
 - 11・7 ニクソン大統領再選
 - 12・22 第2次田中内閣
- 1973・6・25 大久保、コーチャンに国際電話「田中首相に5億円を支払った方がいい」と要請
- 8・9 丸紅の伊藤宏専務「ピーナツ100個」領収証にサイン
 - 10・12 伊藤「150ピース」領収証にサイン
- 1974・1・21 伊藤「125ピース」領収証にサイン
- 2・28 伊藤「125ピース」領収証にサイン
 - 7・15 ホジソン駐日米大使が着任
 - 8・8 ニクソン、ウォーターゲート事件で大統領を辞任
 - 11・18~20 フォード米大統領が訪日
 - 26 田中首相、辞意表明
 - 12・9 三木内閣が発足
- 1975・8・25 米上院銀行委公聴会でロッキード問題表面化
- 11・28 キッシンジャー米国務長官が司法省に「意見書」
- 1976 2・4 米上院外交委多国籍企業小委公聴会、対日工作表面化
- 6 コーチャン副会長らが同小委で証言
 - 8 久保防衛事務次官、PXL国産化白紙還元の内情説明
 - 16~17 衆院予算委、証人喚問
 - 18 検察首脳会議が捜査着手を決定
 - 23 衆参両院が米国への資料提供要請を決議
 - 24 東京地検、警視庁、国税庁が合同捜索
 - 3・11 警視庁、丸紅本社を再捜索
 - 12 フォード返書、捜査終了まで「資料非公開」求める
 - 13 東京地検が児玉を脱税で起訴

- 24 資料提供に関する日米協定調印
- 4・10 米証券取引委（SEC）資料が東京地検着
- 5・13 「三木おろし」が表面化
- 6・22 東京地検、大久保を偽証容疑で逮捕
- 25 ロサンゼルス連邦地裁で嘱託証人尋問開始
- 24 東京地検特捜部、伊藤を偽証容疑で逮捕
- 7・9 " 若狭得治全日空社長を逮捕
- 13 " 檜山・丸紅社長を逮捕
- 27 " 田中角栄と榎本を逮捕
- 8・16 " 田中らを起訴、17日保釈
- 20 " 佐藤孝行元運輸政務次官を逮捕
- 21 " 橋本登美三郎元運輸相を逮捕
- 9・13 グラマン前社長が日本への売り込みを証言
- 1978・12・15 SECがダグラス社の8Kレポートを公表
- 1979・1・4 SECがグラマン社の8Kレポートを公表
- 9 グラマン前社長が岸元首相らと接触と発言
- 2・1 取調中の島田三敬日商岩井常務が自殺
- 5・15 東京地検、ダグラス・グラマン事件捜査終結
- 日商岩井から松野元防衛長官に5億円
- 1993・12・16 田中角栄、慶応大学病院で死去

1. 2つのチャーチ委員会

- ・ 上院情報活動に関する政府工作調査特別委員会（現在のの上院情報特別委員会の前身）1975・1上院決議 76・4最終報告書
- チリ工作：1973年9月のアジェンデ政権打倒クーデターで、CIAが関与。「40委員会」が800万ドル強の秘密工作費承認。米国はピノチェト陸軍司令官を支援。アジェンデ暗殺。
- その他、カストロ暗殺計画（マフィアに依頼）など暴露
- ・ チャーチ小委：
 - 上院外交委員会多国籍企業小委員会1973・3~76・9（延長）
 - 最初の公聴会でITT社のチリでの活動を調査
 - 現役のCIA工作員が初めて公の場で証言
 - ウィリアム・ブロー元CIA東京支局長：1965帰国、
 - 中南米工作担当部長に
- ロッキード社調査： 1975・9・12~5・4
- 日本関係： 公聴会は2月4日、6日の2日間で終了
- ★ジェローム・レビンソン首席顧問：「ロッキード事件調査は、インテリジェンスとの関係が露呈したので終了した」

★ロッキード事件の構造

	丸紅ルート	→政治家	解明
ロッキード社	全日空ルート	→政治家	解明
	児玉ルート	→コーチャン「知らない」	未解明

2. 主犯は児玉誉士夫

- ・チャーチ小委公聴会（2/6/76）：**ロッキードは児玉に丸投げ？**
チャーチ「あなたは目標を達成するため彼に700万ドル(当時21億円)を支払った…彼はカネをどのように使い、何をしたのか」
コーチャン「(児玉に)カネをどのように使うのか、尋ねなかった」
チャーチ「児玉は700万ドルのうちいくらか小佐野に支払ったのか」
コーチャン「それははっきりしません。そうなったかもしれませんが。そう信じます。イエス。2人は協力していましたから」
- ・嘱託尋問調書
コーチャン「児玉が『小佐野の援助を受けるには五億円が必要』と言い、追加報酬に上乘せすることを約束した」
- ・児玉誉士夫とロッキード社：**トライスターとP3Cで計70億円**
- ・児玉誉士夫：米国立公文書館RG319個人ファイルなど
1911年福島県生まれ。赤尾敏らとの関係を深め、右翼テロも。
1937年、外務省情報部長・河相達夫から「中国大陸で実情を確かめて…」と言われ必要な資金を得て中国大陸へ。外務省・陸軍参謀本部の嘱託として汪兆銘傀儡政権樹立に関与。
真珠湾攻撃直前、海軍航空本部・山県正郷中将から頼まれ、上海に児玉機関を設置。当初資金150万円、2年後従業員200人。
敗戦直前、ひそかに帰国。東久邇内閣で「内閣参与」。
1946年1月A級戦犯容疑者として逮捕。48年12月24日釈放。
冷戦激化し、「逆コース」→日本は「反共の砦」に
『児玉ファイル』(RG319)：1945. 11. 13日付バーンズ国務長官→ジョージ・アチソンSCAP政治顧問あて文書「児玉機関の長だった児玉は朝日新聞提供の飛行機で巨額のカネを持ち帰った」
盟友・岩田幸雄「金の延べ棒やプラチナ、ダイヤモンド、ヒスイなどを朝日新聞社機に載せて日本に運んだ」RG319文書だと、児玉機関総額447億1476万円。繰越金15億1039万円。
鳩山一郎に政治資金7000万円「提供した」(児玉)
残存資産は当時の黒幕・辻嘉六に預け、辻は自宅庭に埋めた。
「キングメーカー」：1959年1月16日帝国ホテルで児玉が立会人となり、岸信介と佐藤栄作、大野伴睦、河野一郎が集まり、「岸

の後継は大野」との念書。

米国の情報協力者：防諜部隊（C I C）は当初児玉を「危険人物」、1949年には「反共という点では誠実。ヤクザ的性格。高官と接触があり、重要情報へのアクセス。しかし彼は危険。」

1950年、米情報機関は児玉を積極的利用を図り始める。「私欲のない愛国者。全面的に反共主義。若者の指導に関心。カネに無関心」（合同特殊工作委員会＝J S O B）。

「空軍（情報部）と関係」「国務省の情報エージェント」→C I Aとの関係へ。元C I A東京支局長は筆者に協力者と認めた。

軍用機商戦に参戦（ロッキード社との関係構築）

- ・ **第1次F X商戦**（1957~59）福田がL社ジョン・ハル紹介。
1958年2月、ハルは児玉を秘密コンサルタントとして雇用。
ロッキード社はU 2開発（スカンク・ワークス）で空軍、C I Aと協力関係にあった。空軍もC I Aも1947年国家安全保障法で発足、関係が緊密になった。
- ・ 防衛庁は1957年グラマンF 11を次期主力戦闘機に選定したが、衆議院決算委員会を舞台に反対運動を展開（田中彰治が児玉の意を受けて動いた模様）。岸首相を議長とする国防会議はF 11選定を白紙撤回。源田実航空幕僚長を団長とする現地調査団の報告を受け、国防会議はロッキード社F 104に最終決定。

アイク訪日で自警団：1960年6月15日付マッカーサー二世駐日大使からハーター国務長官あて電報

- ・ アイゼンハワー訪日警護計画では、警官2万7000人、自衛隊員1万7000人が待機、「体育組織に所属し、全学連に反対する3万人の若者が警察を支援する」（この3万人が児玉が組織する予定だった自警団）

ロッキード社旅客機トライスター売り込み

- ・ **全日空のマクダネル・ダグラス機発注妨害の工作**：
架空融資事件：大庭哲夫全日空社長に対する**M資金疑惑**
1969年6月昭和石油社長室からアラブ産油国の500億円貸付
 〃 8月鈴木明良元自由党代議士が「3000億融資」、ニセの大蔵省局長が登場
 〃 9月「川間健次」から直接融資話
 〃 11月「山西喜一郎」 〃
1970年5月29日付東京新聞、大庭の不祥事として報道。株主総会前日の事で、大庭は引責辞任。ダグラス機発注計画は中止
1976年のロッキード事件表面化後に国会で問題化。その理由

は突き止められなかった。全日空の航空機発注遅延が目的。ロッキード社のトライスターは開発遅れで2年を稼いだ。大庭の辞任決意の際、大物総会屋・上森子鉄(児玉に近い)登場

- ・ **功労者・中曽根康弘：トライスター商戦の危機を救った**
1972年10月5日早朝に福田から電話。小佐野が「日航からの受注が決まった」と連絡。日本政府の行政指導で、日航はトライスター、全日空はダグラスDC10の発注方針決定(L社敗北)。コーチャンは児玉に泣きつき、児玉は秘書の太刀川恒夫(元中曽根の書生)に「中曽根への電話」を指示。児玉は「中曽根氏があす一番に、この件で努力をすると約束してくれた」。翌6日福田が「中曽根氏が(陰謀)転覆に成功したと、児玉氏から報告があった」とコーチャンに答えた。
以後曲折があったが、最終的にロッキードは全日空からの発注を得た。
- ・ **中曽根の「モミケス」発言：1976年2月20日付ホジソン駐日米大使が「ハビブ次官補」と特記して国務長官に送付した公電**
中曽根は2月19日に米大使館員(伏せ字、CIA工作員)に「米政府がこの問題をHUSH UP(もみ消す)ことを希望する」
- ・ **中曽根が連座か：1976年7月30日付「大統領日報」**
中曽根は「次に連座する大物政治家との観測が…定着しつつある」と大統領に報告

3. CIAが絡む

- ・ 「PXL国産化白紙撤回1972.10.9」、「全日空がトライスター機導入決定1972.10.30」、「額面5億円の小切手盗難1973.1.3」
この間10.10付から12.19まで児玉への支払い計10億5000万円
児玉、1973.1.3に「5億円相当米ドル建て小切手14通などを盗まれた」と警視庁玉川警察署に通報。ロッキード社は支払い停止を要請。(ニクソンへの資金還流か?)
1976年2月9日、久保卓也防衛事務次官「国産化白紙撤回は国防会議直前、後藤田官房副長官と相沢大蔵省主計局長が首相官邸総理室で田中同席の下、決めた」と明らかにした。
- ・ **1976年4月2日付NYTアン・クリッテンデン記者：**
ロッキード104戦闘機の対日輸出で日本政治家買収の詳細はCIA本部に報告。こうした情報は1958年当時ロッキード社

に勤務していた日本人がC I Aに伝えていた。

- ・ 同年4月10日付『ザ・ニュー・リパブリック』タッド・シュルツロッキード社の対日秘密支払いもC I Aによる世界的送金工作もディーク社が秘密のチャンネルを提供していた。

- ・ ディーク社のオーナー、ニコラス・ディークは1905年ハンガリー生まれ。国際連盟職員を経て渡米。C I Aの前身、戦略情報局（O S S）要員に。後のC I A長官ウィリアム・ケーシーは同僚。ディーク社はO S S時代の仲間とC I Aの秘密工作を外国為替業務（黒カバン作戦）で支える仕事。

東京ではスペイン生まれの神父、ホセ・ガルディアノ（帰化後の日本名、保世新宮）が東京で運び屋。香港からのルートは不明。

4. 脇役 すべてインテリジェンス関係者

福田太郎：日系米国人。戦前、ソルトレークシティー生まれ。短大卒後に来日。「早稲田国際学院」で学び、国策会社「満州電電」に就職。終戦後、G H Qで通訳として採用され、フランク・オニール検事の児玉取り調べに立ち会い、以後児玉の通訳に。

児玉の支援を得て、P R会社「福田渉外事務所」を立ち上げ。福田は児玉とロッキード社の交渉の場に。コーチャンも福田を通訳兼助手のようにして使った。

事件表面化の3日後、1976年2月8日に入院、肝硬変で死ぬ6月10日まで59回、臨床尋問を受け、35通の調書を取られた。福田は東京地検特捜部の捜査に協力的だったと言われるが、特捜部は児玉を所得税法違反以外で立件することはできなかった。

鬼 俊良：1921年生まれ、湘南中学を出て、上海の東亜同文書院を卒業。1946年日本に復員。54年にロッキード社入り。カリフォルニア州バーバンクの本社勤務。62年米国籍取得。

シグ・片山：日系二世、ロサンゼルス生まれ。陸軍に入隊。戦後G H Qの経済科学局。鉄輸出入業。ユナイテッド・スチール社。1973年ケイマン島にペーパーカンパニーI D社。領収書発行。福田とは「パレスホテルの食堂で」、鬼とは「同じ頃」いずれもロッキード社のエリオットまたはクラッターと知り合った。近くの日本郵船ビルに参謀第二部（G II）が置かれていた。河辺虎四郎元陸軍中將は「G H Q歴史課」（事実上の下請け情報機関）所属。

5. ダグラス・グラマンと岸

1976年9月、チャーチ小委の最後の公聴会。

前グラマン・インターナショナル（G I）社長。トーマス・チャーナム。早期警戒機E2Cの日本売り込みに言及

岸信介元首相、福田赳夫前首相、松野頼三、中曽根康弘に接触。

当時の首相、大平正芳は事件追及に消極的。

「フィクサー」ハリー・カーンが岸をジョン・フォスター・ダレス国務長官らに紹介。